中村俊定文庫
文庫 18
382

芭蕉翁は同友彼新利水老人を
かなしく義柿舎去来子も水魚は
交あつしとて東都より
ゝ捨る比左は一小冊子を袖
中ゝ家より拭とて祖父伊藤晩号一道
ゆゝしく祖父秘書を授受年のさとを
函底より魚の巣をあらはしを
且道の一卵毎ゝしめんと父重好

生稿よりせんこうせんこむこの冊
はもゝ湖東問菴と号せしを去年より
二字を添て作者の名をあらはしむのを
于時宝暦辛巳冬 猟身 松村梳境
自序

京都帝国大学附属図書館

京都大学文学部

世俗といへる所の旅寝一夕の書林市肆の許
よりこれ此の集として泥化の續有孩風ゆり泊瀬許六の
篇突三ツの集とをとりて武日ゆ浦の卯七魯町るを
付てそを抜ひろふ外の二ツ也爰白連俳をひろひ
篇突集ゆ乃の教五支の位を記して執りの人の
助おろす我ゝまし紙しき節もひ人仏生ハ彼先
紙陣をおこし一ツの書ふゝむ我蕉門に年久しき加
盧先ゝとしへとも白ゝおかて毛雖ゝるゝ丈第に
及ひ沢ゝもさやゝるゝ其角ゝ宗ゝ八手拾ゝ事跡波ふ

及ぶべからざるの古芳と及ばず巧みなる事許六に
おとらざるべけれども事古文考と及ぶべき事なるべし西秀と
及ばざるべし曲水は殘蹄の越人洒堂の業に及ぶ
べからざるべしとも名づけ一筋なり松尾人と張らず
されど拙き句を仮名に後学を許さんハ流石に怪しき業
なれども只此の業なる師説を按ずるに必ず深
きらんく人をあざむくやうなるべしと思ひ侍るなり

元禄十二己卯三月　去来旅人自序

一同云許六の箱突集を見侍るに業旦の句二ツ三ツ記
出すやからとなる又子の日二日三日なる新して出す
人もなり師説は亟侍るや業なるべしと師説者
侍るや
去来答云はる我いまだ試すべきなり試業旦の句
二ツなるらんく出すべきなり自他の句を述べる句と師も
よしと許し侍るべ若ハむかしなれども今ハ遠ざる事なるや
なるべく東坡の詩集を見るべき己卯の年業旦三首
あり無しなれども事ふるし感ずるなれば他を
数ッ見ることも風雅の上ふ雅なる事なり但同

新年を白紙のまゝ多く出さんハ凡若しかるべし
詩句の沢山にて寸毛作らん

一 問屋出の年賀状を通力するに紙年賀
大津絵の年賀状代年賀状の様式にて今日ことに
仏教白の年賀ハ二月問屋迄出いろ仏教を法式
学びはりんや

巻書出の年賀状まゞ出す年いろるを通作るも
きゝ人巻書方の白初書に出さん年賀状日月相違
あるやをハ〳〵かゝる所一切限り作らハ書寄
年賀状ハ二月迄の比関東にゝえ初書の乗及後に

而こゝら仏若代の志むなしかん能因法師の白川の秋風も
文右衛門のはゝ一枚あり千紙のゝ古風歌の凡流
なるを代古人も法て船ぶとあるこゝ京ぶ北
名家巻の年賀状も年のうちに出したゝ書家
二十日方日お拵ありしも若しうる所に乗只
又十寄をりして百寄をゆるゝし先師の教今
京猫不派義もに年賀状に合こゝ凡出しゝるもも
多しゝ又大津絵の年賀状のゝ巻年家方に年ことり
絵ひしゝハ絵巻の絵おうこゝ洲に書をむゝ一二日
口ゝ紙からゝす彩巻日

大津絵の筆はじめハ何佛
と作りき此お手本代の格式といへ孔雀かゝ
只手すさびに書ハ事多し但毘沙門天三日ハ箭祝
用るとゝ成ル兎角試筆の日ハ元日ゝもせゝ二日
云ふ事とせゝ只一句入ることゝ成る格式ゝや是来り
年竟二日ゝ今し四日ゝ絵ハ一ツ占強人の
凡流一ツ占風雅の感偶ゝ強く一句ゝ限るゝ事
ゝ絵を相作ハ何ハ歌ツも又ゝ我一己の見解
ふく作ふ作ふ作いそしかゝ但二日以下の句ハお手
筆ゝ成ル事ゝ

一問元日やと手ひらめゝ句ハ何ゝ事も又ゝ
い〳〵ゝ先師の句ゝも元日とい〳〵る冠ゝ用ひい作ん
ゝ元日とゝふ句ゝ外ゝ句ゝ作ゝ元日やとい〳〵ゝ
やの一字ゝて云紫平懐ゝすゝ作ゝ作ゝ事と
事ゝ作ゝ云事新年旦の句詠ゝ惟然相作ゝ
ゝ迄ゝ思ふゝ代ゝ元日やといそんゝ作ゝ作ゝ
一字ハ黄嘆ゝ云紫ゝ元日ハ元日ふてといひて
注ゝ先師近化の事ゝ梅舎ゝ入ゝ秋高時ハ
流行を何ひ作ゝも詞の平懐なるを者ゝ嘆い
作ゝ作ゝ先師なくゝ作ゝ作ゝ既ゝ四ゝ年も

ゑぬ許六の写本も見せんと云るハ是ハ
流りゝ梅ハ行るゝ紙いまゝ屋りをきゝん
又元日とゝ云ハいつとても用捨ゝ云紫ゝ
初春元日花の春ハ許六のいへるきく白ゝ
伝ゝ板別ゝ云へ〳〵ゝ

一同巣旦五季の板とゝて許六二句あげて志めさば
五季の句とゝ作るや
芝先師も適ゝ五季の句なり紙ゝいまゝ押出ゝ
芝ゝ作ゝ活ゝす武門宮ハ神祇釈教哀傷
五巻述懐歌別恋旅名所ハの句ハ五季の格

ゝ紀ゝのゝ芝ゝ奥ゆせんと思ひ付れとも略く
ゝ五季の句とゝ云るハ落馬の附ハ奥ゝ
歩行ゝハ杖つき坂を落馬られ 翁
何とゝく芝ゝ吹ハもゆれ 松風
句ハ先師の強りをゝてゝの今ゝ
恋歌ゝて物ゝ年ゝ紀ゝ 去来
芝ゝの句ゝ表裏ゝ季とゝ見るゝ不ゝ
乃ゝ張ゝ板ゝ行ゝの此ゝ今許六の挙ゝ二句ハ
五季とゝ云ゝ表ゝ季ゝ云ゝ
何ゝ付ゝ巣ゝの句とハ云れり一芝ゝ先師巣旦ゝ

年〻や樣〻為をさ〻ぬ樣の面と作りを季いく
作りをさ〻と何ひ作りをさ〻年〻ハいくとのたまふいく
所りをものうをと近ぬ年〻ハ季の詞と作らをかくの聚ふ
さて詞をさるべ〻表と季ひ表〻〻季と成白
近年所白ホ〻も祖ひ〻〻作りを〻又其角ら四ら宗祇
下のうを嫁〻姫ら表ハ分論嵐のうを一説と大年の秋
大星柏のうを〻に大を焼〻を嫁ら表とふとい〻
思ふを嫁ら表を指けうを灯ひうを〻〻ハ大年此歌
元祖ら〻て嵐の年を嫁ら表とふまやむ本説を
をらを嫁ら表ハ表季て嵐のうを此歌ら一つ

一句祝年之の格式先も表季の詞とむをひ祝をお白を
所りを祝ホ表と〻〻尋常面顔俳諧の口三白川
出〻〻る歌て歌て歌且三拍の拍柄ハ〻〻を〻ハ
小車の歌表巴るら〻〻ハ三白と百顔子白の信
所る年を表ら祝を〻ハ祝者の祝年之と白詞り作ら
年祝年〻歌且三拍を作るを〻ハ〻を表をら表
又之師も汝ら三拍を格を作らを〻ら答詩年年
を内表白ハ〻を祝れ服ら表白て
梅〻雀乃 枝の 百 ちを
とふ白所ら之師浦川を出白を評して之二月れ

元及び元来なり思ひあやまるやとのうたがひ
なりとなん又許さるゝ所も一理あり古林文考
及び孫康して卯七と表合なり象子注云
化表合号の俳諧ハ弱者の手仙百韻と名付し
表より四と一変の姿城迎て云無拙もあるうち男ひ
ます〳〵孝之とゝ〳〵是一流面白うゝしと考へ
二子の先師と為さく寸言きける事なり又古来の
法式すや又二子桑田の業と合ッしるるや今返て
思ふと古法師伝とよりハ論ずるに及ばず一巳の見解と
なるハ必伝ん共一附の仏流ともなるゝし

古式といへんも如しうゝ〳〵元之師打く古法を
破り新式を定給ふ事ハ制をゝ越き事ハ試廣めて
句と秀句多かるを計給ふ之門人と称至
給へ之中至らん人ハ〳〵然とも故実を論へ稽と
破ぬ給ふ事なり今二子のごとく法を定むハ三教と
一理原源と和て人の害なるゝ源くと師の
腦を豪〳〵ものゝ〳〵ハ〳〵なるべし

一同中秋前月乃年と元好字を容易と至ハ
元来未徐のゝ古人元の一字と勝城ハ事は
乃やすゝ〳〵次多月乃と元好月見ハ帰りゝ〳〵

名所字迹代用の字事人〻ゆゑ来なしといふを
名月といふるるハ月の名なる故実作るや又用の字ハ
嫌ふるるハ作るや
答されハ三文十三和の月和〻なる名月といふ
そうちいつまで月うたて名月といふ所
然とも今日名月の詩を作るんとあるうち故実を
ふまえ限定故実ふたうハ和歌なる〻又用の字を
用るるハ和漢ともに三文の清光と嫌ふ〻来る
ゆへふるとを通ひたるをもつく通用すへし
こまかるるハ中〻作ること又漢家ハ名の字ハ三文

十四和のるハ俗語を用る事なし然歌の故実なるれこむ
十三和のるハ俗語を用る及
一問答といふ白ハ為先こ紀氏こ晋子ゝ者を
逢ふとを見出ふる眼こそあり玉逢事の学
秀逸とやいてんといふ白ハ作るや
答白風情あり然とも初ると代といへるハ作るん
答ハ月を作ふ海こするハ戯名こ戯名ハ事の
元文をあ〻ま初ると代答ハ月を逢ふる風情
初ると代のめくなとも彫り今其角ゝ答を見る
月ハ安を答ふ〻白ふ色を言を画屏ふんとの

おく他しらぬ白こ傘くゝ寄れなを恋さそうと
いちんゝされハ素行ゝ白ふ
うくひすれ出ますをて初言うれ
山白を天蓮の連中誠ゝ感嘆すと英法怒尼ゝ
許ゝり白ゝを若来ゝり光時寄の姿ゝ行ゝす
只拍を他ひく能舞ゝんとするゝ又拍ゝ寄ゝ姿
又ハ傳を拾ふ形ゝを角ゝ白ハ鳴ゝ寄ゝ面素ゝ
白ハ出ゝとまを白て拍ゝ行ゝ月見お意すし
松ゝも出ふとまりてゝいちんハ拍ゝ又附ハ
遊ゝ云あゝるゝ人もゝ之師立世の四門人の

日ゝゝに敷ゝ行ゝ黄ゝ浴ゝ白ゝ美ゝ寄れ
白ハまゝゝすゝ
一同ゝ師の白ふ一声の行ゝ横ゝふやゝうゝすゝ又附寄
声横ゝふや水ゝゝ（山二白沿徒ゝ刹ゝて水のよ
方ゝ横ゝすゝ詠ゝ寄ゝ之師ゝ人乃詠ふ法ゝ白ゝ
定行ゝす行ゝや
寄山寄ゝ之ゝ法徒ゝ限ゝす門人の詠ゝ寄ゝて
白ゝ定法ゝす美ゝ
一又同行ゝ横ゝふの方ハ徒ゝ行ゝも下ゝ寄ゝ之ゝ后詠
乃ゝ白ゝてゝれゝゝる花ゝとゝ之ゝ下ゝ附寄ゝ寄法ゝ白

武士跡を横ゝ武ハ京ゝても京なりしゝやきか
いう程も作ゝん共此一白ハ此ゝ之師の此一巡
所ふと云りいうなるゝやゝ
是許古のいへる不定てゝ我面出てきれて右だ
清濁ゝうゝ孤兵右衛門当るをきゝすゝ又他を
横ゝ馬ひきもけゝ何ゝ本ゝ此ゝ案摘きゝや
かゝてきすの二白ハ上の十二字の間ゝて多系紫ゝ
ゝりゝ此一白ハてゝ中はゝゝゝといへる。我おきゝさは
ここゝ為なり

一 此初書書形書のさうし行を安ゝといへゝを行きゝ

事なりいうなる人ゝ此行きゝ行ゝや
是いうなるかもきゝゝす

一 同村百ハ五季ゝて赤ゝ季を結ふゝて習ひ格式
なりとゝゝいうれる習ひ行ゝや
是いまゝふゝ習ひ此きゝゝ我先村百といへるゝの
一程みゝてかの百ゝ此ゝ久立ゝあゝ此百ゝ
なゝすゝ此情をゝくきゝる。九村百ゝに
かゝらゝゝ京情ゝ遠ひゝく五現の位を仮ゝも
作ゝへゝす是右より強人の作ゝ思ふ不ゝく
ゝ京情ゝ叶ゝ何ハ六なゝ第ゝ一此きめきゝへる

風雲と称りひを雲ふむなかはまむへし

一 同奥山の藤を中くらゐ雲やせる紅葉るるへしこの
説多り雅楽とけりや
芝いうくはるへきを師匠門の発句を考見るに今
さしかりそふて集とる発句ハ多く陽山の
藤と又陽山奥山と雲ふ句なり一ふくに奥山の藤を
吟しるを見るに十とせはかまり昔とやはらん

奥山や又ゝ志ほくく藤れ戸　去来

此藤山のたし伊勢記り一ふくつ深川とる句
と一ふくを貴して文章等と発句と結ひ句この若き、

沙法寺今迄くふふて指き白し紙とも奥山れ
風情とそれ〻ゝ許六のいへるハ山紫白秀逸の作
なるべかるへしとおもふるなり

一 同牡丹を連俳たゝ立の手まを用ひ来るの古人たゝ
楽しふる花ゝ出さりといふ句いふる事とけりや
芝ひるいまゝ考ず友れ家拘すくるき西へゝ元を
友ゝ遠りふらとふ一説も作る

一 同去の若ゝ対して秋ハ若と若秋とふ作る他者
多しといへ共秋の若ハ秋乃夕月若ゝ去れ
若ハ若去の事ゝ作りけりや

を春は春の色を春とし又一所に見る限一首

一句の新しきもよろしく

一同浦乃苫屋の夕霧者桔梗の秋乃くれ

淋しき紀事を淋しきとは御り是苫屋のおれ

乃臭之配する男と淋しきを拘て秋乃くれ

ゝ云をむすびて淋しきする八御詣の玉ゆ見

お尚の位八めしもかゝらんと是八我御詣

秋の色抔と淋しきを拘と結ひ合せ

を是を許古和歌御詣のお尚の事をいそんなく

秋の色と淋しきを結ふと必なきとする

ゝ寸是を引取和歌ゝも浦の苫屋桔梗の

皆淋しきを拘て秋の色を結ふより文章八前後に

考方を見るへしはひしたる淋しきの位

むすひ目出度ものゝ為めてたき拘を結ふ八天然の

俳句淋しきを拘ふさはしかゝる拘を結ひ目出度

ものゝ為めてゝ淋しきを拘ふ事を結ひ一句ゆく首尾と

なるは作者の御心古人を仰の位の見えぬを以て

是此の位あり先師の

病床に頭を傾て落く旅寐哉

とゝ云句の新しきゝ

一同律六の説と云ふは佛陀の出世ハ二の意佛陀の
意と云ふ意ハ佛より出て教ハ佛陀
より出て伝ふるとの説ハ佛陀
意ハ高広と古来より二の名ハ佛陀の名ハ
あり一意を仮初と云て云ハ二つとなり
すなわちも多く意を論する時ハ和尚ハ制法多く
宗りて意も多くハ佛陀の法ハ教ふ故
此れ和尚の名ハ和尚の意なりとなり事なく
名ハ佛陀の名ハ佛陀の名ハ通ずる故
佛陀と用ひすと云ふ故一ハ和尚と乃ハ佛陀

四眼ハ経遠ひ経ハ和尚の部義業
業経ハ佛陀の部と云ふ義業
あり部と云ふ部ハ芳地ハ和尚の名ハ如来嶽ハ
佛陀の名ハ云ふ芳地ハ佛陀の名ハ
いふ部ハ芳地ハ義やう地を仰ぎんをおも
和尚の部と佛陀と云て押て作すなり
芳地も佛陀の仏あり古人を意ハ乃和尚
をれてやむすなハ云ハ
対ふ部ハ云ハ佛陀ハ行業ハ
一同起して作ハ人ハ凡夫の上ハ

なりしと云ふ是れ絵事さうん人の至人なり
除中一技や
是れ所謂技ハ屢々以て細なる業をなるものと許ス
一事を挙て人伝ふ者多く教ふるもの乏絵ならずと
いへるなり故の一事を肝要とし一絵ならざる人ハ凡能
をむさぼるなり又顔蹇叟之師の説を挙て
示はるの一節もまたなるものハ凡能をおのれ学ま
ずとい云ふ是皆所謂一行に成ずむるなり
代の帝王絵を好し給ふハ称し絵も多くハ学ば
ずして又能ハ能て初て二百里を行ハ

半ばハ九十里を今日十八として猶疲せずと
なるなり故ハ陸を四十ケ日未到ず之ハ
又十余年牛馬の無ふるを能ふるを能ずとせ凡業ある者を
能疲ふ猶ほ中ほ及ふ能ハ百人ら
中に出て十人と為じ能ハ少し能く吟ずるに
白ハ白て子ら一を法ハ学ぶ絵ハ牛の凡能ハ
能ずんと云ふ能ハ学ぶ絵ならず猶ほ猶ほ
学ぶ者ハ是ハ不ふ困ふ居ふ能ハ不ふる人ハ
凡能の乏ふ大なる助ふる人ハ只絵ふ人ふる先立ち

頃歌偈人の長者といふものなり

一同許六蕉の書をとりて凡の秋といふものを或人
士師の蓄の等外表をせりけさの書といふものと
仮例する〳〵と紙〳〵ならはしも若〳〵かなら
〳〵無之とはいひて定め給ふや
是先仮例と等数とハ遠ひなる〳〵和字と仮例ハ
彼字を引くとすえとり等数ハそを保る俳諧又は
等数ハいふと及りす仮例も事とり用於又〳〵
今許六の論をとれを等数の矢とたてとり之論又系
と〳〵ものをかしく同〳〵して大と遠ひなる事一之所の

昌の等外表をなし給ふ白ハ古人蓄の等外書を
去る伝迄〳〵て吟〳〵るなとなら今の新の扮静
霜白〳〵重波〳〵蓄の等外表ハ表ハ出て流行を凡
凡情の見るを不知るを俳諧の眼と白眼出〳〵注〳〵
又彼字を引くと不の和字も無心〳〵やうと給ふとも
凡情を述る不格別〳〵只〳〵去夏の新を出て秋
白川〳〵ならは長途と日数を行るとふ一行の事に
ならは一を八秋凡吹〳〵白川の凡情を保〳〵一を八
紀行ちと変白川の氣文を述らたり然は二ッの
事情白川と遮せさしんすは猶能因歌枕と詠し

猶ゞ之師のゆき武あつまれ人と情をかけるこゝ行るゝ
おもしろきをもつてさるゝ人ハ却て行末ハ中ゝ
ふまへく迫石ハ毋波も語る一きと敬ゞき之師の
蕾の紫もはんし蕾の紫乃表乃人を風情をうんこハ
変をゝ猶ゞ今詠の蕣も裏と見せくゝ
ゝ風情あゝばさもゆゝ兵古人蕾の紫と詠ゝ
月おゝ蕣のゝをもらゝ嘆るゝみてハ何
作ん古人乃再来して蕣のゝハ乃世作世表と
乃世ゝ風情可ゝゞる世人をとゝ作といゝで
いゝ之作ん著氏地の紫の裏吹乃月るゝで数見も紙

作古も定ゝ乃表ゝて愛ゝとハゝ作ん乃風情を
ゝゝ作ゝて紙ゝ也作ゝ作ゝ又等数の年代
著ゝゝ月門ゝ乃て紙ゝ愛海あり今邪ふいゝ
紙作ゝゝ之師世宗子の詠二ッ武筆て世を表ゝ

面構ゝ内石ゝとゝゝ不ゝゝ　野水

山白ゝ之師の引ゝ也けゝ作ゝ等数ゝ之師
化北ゝ海ゝ之作云世ゝ白ハ内石の付ゝを吟ず
ゝ歌乃ゞゝ去来為ゝ作ゝ世ゝ上ゝ
内石の付ゝゝゝゝハ和ゝゝ詠ゝ
世を俳諧ゝ白眼ゝ面構ゝゝ作ゝ紙世

脇句ニ行り芭又師の引出ものを送られしを
発句ニ新を遂行るも跡ゆふ栖行るまゝ旅ゆ師の云
句掛ケ又栖ニ寄ハ御尺ニ行られ

清潔や波ノ花ちるさ夜の月

此句ハ清潔初の吐しを師易笑ヒ（賞）ニ附我を学ブ
此句ハ実ニ如方ニて

白菊の月ニ立てゆる蕊をちる

とふ白を仕ましを清潔の白をは一段ニ勝ニ
跡四ヶ月ニ一巡菊ハ枯り控へしとて

清潔や波ノ花ちり過る　芭蕉

人師の白を清潔ノ花ハ行ゆ花ちる
事ニ仕ゆ〜ねど名人の句を用ひ給ふ
波ふ花ちるさの白ハ波ノ花ちるを下ニ
白と云ヒ門人辛ひ出して集ニ入ル
芭師の句ニ清潔

相の木ニ風ニかまりぬ蕊ちれ　仙化

芭白ニ師の

楼ノ木乃花ふ白ぬ　安ち

と名歌ちと其角ニ仙化辛論ニ角ニ師ハ
楼の蕊白ハ凡京ニ花ニ一ちる縁ちり絲半ちる

一句し吾子が相の木ハ淑樫より木こそ指沢と拾し
集めこるより必ハ人の句を花〜事〜ん
情こるき仕者〜いひつ事〜

月雪や祈ハ〜く名ハ添こそ　越人

ハ句猿蓑集の事ハ〜撰入仕ハ〜伊丹のこと
ハ云来と八ハ事で云やハ祈たきといふ句ハ事て入集
句仕ん〜何ひ考ハ〜ハ所云ハ事ハ事ハ聖りなり
句こお力て終〜ハ事ハ〜〜と下知〜たまへ

門口や牛ハ事ハ〜られて　初付句　紀去来云
ハ表根の連中の句こ一ハ事ハ許云のさらり句ハ

ハ事〜ハ事ハ句こ角が弱ハ所新しかる事ハ俳の礼
といふ句こ元味ハ事ハ表こ〜〜〜ハ事ハ〜ハ大こる
我あやまりこ仕ハ事ハ付ハ句ハ端こ仕ハ事ハ表者〜ハ方こ
評せこ大事ハ事ハ〜ん仕ハ俳乃あまハ事今こ仕ハ事ハ

秋ハ事ハ目こ〜たハ菊の苔こる　去来

ハ句ハ去来ハ事ハ〜ハ事ハ所ハ事ハ事ハ事ハ〜ハ事ハ
所こ仕ハ事ハ拾こ句こ〜ハ事ハ所の目こ立て仕ハ事ハ句ハ
ハ新仕ハ事ハ〜ハ事ハ〜ハ事ハ所ハ事ハ句ハ事ハ新ハ事ハ
芭蕉俳諧考こ〜ハ事ハ〜〜又後句ハ所一葉〜〜の上こ彩こ
事ハ事ハ一〜〜ハ事ハ云のこ〜〜ハ事ハ〜ハ事ハ〜ハ事ハ小力楊枝

なるのみなく余情をもうんぬすれば流布之見あるすれも
有人〳〵さもるるさ然るもそれハ我白の強なるゝ〳〵なるしく
心ハ行きたれ突出きるや梅の法まるの養とゝるる白之
於行〳〵ハ行ゝ

一問佛諸ゝ大乗速ゝ之中より我も佛諸ゝ法を
信じ申ゝ和ゝの一称ありれ申あるゝ云云拙形式をも
ゝ〳〵ゝ速ゝ之弱しと宣るるハ師説も拙ゝ
いやゝとゝるるハ若〳〵ゝ申ゝ之ゝ申ゝ
ゝ仏諸ハ和ゝの一称すゝ之を
上下に分ゝ申ゝ也ゝ一白二石云拙ゝ

迦之奥ゝ申せゝ申ゝ問いまゝ宣て法ゝハ申ゝ
法式速ゝ之ゝ申ゝ白ゝ之ゝ書ゝて今の法式宣ゝ之師
ハ乃を和ゝ申ゝ申ゝ法ゝ法式ゝおゝ
古法式者ゝ法ゝ申ゝ法式を拙ゝ法ゝ申ハ十ゝ
八九ハ古之ゝ法ゝ拙ゝ次顔の比をハ多く法式を拙ゝ
法ゝ法ゝ申ゝ申て今ハ元ゝ申ゝ白ゝ拙ゝ許ゝ
心ゝ申ゝ今之師の拙法を拳て之を拙ず武人之師の
法式を拙ゝ法ゝ申を拙ず我を事を奔ずゝ
人の云ゝ〳〵ハ行ゝ申ゝ申ゝ〳〵ゝ理あゝ事ハ古人の法を
拙ゝ申ゝ〳〵ゝ拙ゝ申ゝ之ゝ云吾子法を拙ゝ拙式

愛して天下の人三分一も益弘用ひ形式を立て
美を信ずる人なりんハ信なるべしとなく信
之師をもて弱ひなく必人と幸ふなりも我邪道と
おかて武ハ法式を悟滅するハ大なるふまめるあること
いへとも今日の眾人なるものをまぬるもの出ずこの
法性をもていたるを安く進しめんが為しかを仏く考
ちるべし凡法を破りれを愛する事ハをんなるべし
又史邪の邪道の法式何の書を用ひ伝ん何なる
法書の説く所ハ光源氏なるべしそれ邪を云ふ
且うるべしとなる師もりたまひきぶ

一代前の前書をもるるを白の講釈に茶とつふる
を白は茶を添るるを一とを沼尾を番子の白茶
俗る付許云を説く云部人の茶子の白ハ粗をいひなら
は茶子を返して白を人井を有るとて
ちる付ハ仏も形すれ茶子のをれ
とき〜とへを許云云部人の茶子をて師乃名人
ちるをへり書をのいを少白許云吾子がいるを
は茶子いひたらざるを人俗をるとを云茶を俗て
俗別の白を〜猿蓑集を入を俗をなり今茶
をる茶いひたらぶを茶をいるを茶をさ〜

二子ら洋をしゑけるや
芝

ちはやのやすらけしのそれ　詩人
といへる白こは白狗いひたるべしと云るはらぶ苑子
一祇の白とかしても風情云おろせしり詩を倣別ろつ
ゆるるおのりいひたるといそん白ハ
傍訳さく人を弱くやアはくら　真角
又市の新ゆる同やアそ　去来
角が白ハ自落といへるを紙ともはは白ふをすぐ春山翁さ
逆ひく奴僕中のものを傍訳そ〳〵後を弱わ弱る

命といへる白とちんさを白とそらいひたらすはおく
すゆる同白といへるおのこしきれもはすて白をおく
ほ不紫を思しはまだ解すゆる少こするとハ思ひ
光らほ不紫思りるおもく云かて云原のうり
ひる方もなく折すゆる徒てむりしに白しも
あらだ思いひたるに白こ氣はるの白も白新ハ
するこしかしいひたらずと之師洋しはひね
又詩人が苑子ハ花を光を陶淵をあるに詩人語遊を
別るこはの白とすめ猿の義集の比詩人語遊を忌
四人を倣を別るこの二字をひらこめ之師を拙く之師も

詩と異し給ひ給ふ又お手ぶりの作古のいへるごと
謙釈のごとくなるべしハ後白の光を考ふれば此きり
おなじ茅文章ホ蓮門の法筋なるべし又新人雲角が
茨子の浮ハ新人猪是なるべし之師の作ぶりなるべし
一同古事古文を和歌若ハ当世の歌を挙れ
なり之間当時の和歌ハ古の古文を変ぜ変ぜずして
作ずをおまが作意を並べ是をとゝ是ハ今の
和歌ハ古の古文詩を並べ作るなり
是詩古の古文詩を変ぜ変ぜ作るなり
いへる事と必ず変ぜ変ぜ古の古文詩

変ぜずおろそかに変ぜ変ぜ作るなり
和歌を変ぜ変ぜ作るなり
已ら作ぶ詩ならべく是すと云ふ所を掛あげて作ぶ詩作ハ
ぶと云作ぶハ初の案ハ美語も出来るべし
一句掛あげて作ぶるとつゆ知らぬ並べ
悪しとふふ作ぶすべ美語出来るべしとなり

拙の寝て ひかるや月の月　玄来

山句自讃ぶ之師ぶ拙句ぶ作ぶ跡ぶ
山ぶ入廉の句ふぶ作ぶ蛙ぶ作ぶ蛙ぶ
事ハ古人も能知ぶ詩ぶ今俳諧の上ぶ廉ぶ

方や月の日と化したんらてハ汝ら栖みるへしと
ちり能く発ちるへし又面部と云白あり是ハ
摺ち鄭ちにあらん

名将の橋乃反ち扇うれ

とゝるゐとゝ名将の仏みて白ゝの栖みるとゝ全
けいゝるホの苦の毛孔ゝけ不ゝ今ハ去物いけるゝ
又淡鄭のゝ外ハ事を云くゝ変ゝ成るゝとい可
ゝ仏事ゝ賀鄭ゝ方ホの白ハゝ場を失ハさるを肝要
ゝ仏一ゝせんく集りて本首塚の白を吟しけるか
ゝ師一白も元治りに門人ゝ徒ゝ云ハく物の読

名ホ号の白ハゝ場をゝるを肝要ゝす西りの
読を文覚の絵ゝ事乃石の変白を拾ゝも用いけるハ
ゝ月変ゝ人一白の名恐ハ事二号の事ゝとなり
鄭昔ゝ師の本首塚の白を拾ゝ白なをとおゝ人りハ
初てゝ絵を解すゝ山ゝ本首塚の白ハ場ゝるゝ場ゝ
いゝも元ゝ治ゝ人く猫義集ゝ入ゝゝ下ゝ
治ゝ又鄭仏の白ゝ和仏の白ゝ人ゝ丈ゝ塔乃を
業ゝ治ゝ正要ゝハ五ゝ文ゝ人ゝ白ハ拾花集ゝ入ゝ
一同発白業ゝ人ゝ苦ゝ毛の中ゝ白ゝ業ゝ人ゝ姫い
侍ゝ外や

芝芝又許六ゟ一帖を揚く初ハ二ゟすゝものるゝ
曲輪の門外を法く論す〳〵人数も曲輪門ハかく
外ハ七文〳〵許ゟ曲輪の門ゟり求く形変事なし
適〳〵弱ゟる物も傳教のゝものゝ日〳〵く芝を棄ずる
日〳〵曲輪のしで殘ゟる物ひしと弱商る〳〵しゝ節
者〳〵ぶしハ銀ゟ〳〵曲輪を死出く事〳〵たらんゟ
釈八子の事〳〵而と遠ひゝ子ゟ釈の仕意と指引ゟ〳〵
い〳〵芝芝ハ一斤の足解し曲輪の外を棄ずといへとも
日門の数白文〳〵芝数を文るゟ節の日〳〵たく
遠ひゝゝとのあゝ

一又問曲輪の門ゝ適〳〵ぶゝるゝの仕さぶんゟ速ゝ
死出く求むゝ仕ゟ
芝吾子たゟひ仰ゟ文たのぬく棄〳〵ゟ〳〵し
曲輪の門を仕ゟ引ゝ宮ゟ曲輪の外ゝ摘ゟ
月数ゝゟハ月仕ゝゟひゝゟ〳〵ん沐ゟ感偶所奥
ゟる物ゝ曲輪の門ゟゟ求ゟ求る白文〳〵ゟ師
芝芝の白をゟの者ゟ〳〵又白ハ芝の時と芝吾
〳〵ゝとゟ仕さもゟ〳〵ゝゝん又物ぬゝゝ〳〵し
い〳〵ゟ仕芝の事〳〵

一問てゝの切字押字の所ハ上ゟ下ゟ左ゝ一字と不係

い（ゐ）ろは（ろ）と蓮門の教白と切字み記さく侍るまいて
善き悪き聞いるそ成ものハ用捨白ふたたり
山中人（と）切字なきも白もまことに侍る事門切字とまく
白も切ざる白の侍るハ蓮門の法とい（う）ていまゞ切字ハ
事を侍（べ）きして猥（に）切字なきも白と師のをきふと
おもふい法他するなり（し）又切字ゑそもちなくとも
ゆ（え）ふ白ゑ光ハ法のをく切字ハ入侍るをよしとす
切字を入侍ま白教師切字を除き侍ま白ハ宣教師
白に切字を入侍るハ凡んぐ白（し）かる（し）と師の
書（き）教給ふ事也

一問ふ教白ハ孔合まるをのし二ツ孔合ゝと孔合まるを
上品と（ゐ）ゐ（ろ）と詳ゝの孔ゑ孔と蓮門の教一抱れ
上ゑて教白ハをゝさるふ侍るや
答ゑ又ゑ師一方の教ゝ猶不の連流ちゝめけゝ孔
中ゑ光ゑちづむゝの多（し）孔酒蓮と事ゑ事ふ
ゑ孔酒蓮武師ゑまるゝ孔ゑ師告ゑ法安ゞ
教白皆抱を二ツ三ツ孔合ゑて白をなす教白ハ
ゝ合を却ゑ（て）ん抱ゑ侍ま（ゐ）と教給（ゐ）ゐ協京の孔
孔ゑ孔て孔酒を悔教ゑ光師の門人ゑみ猶ふを
一所ふす（ゐ）ゝ（ろ）ゝ白の法ゑ信口質ゑよりて抱ゝなり

和さ〻ぎの紙さハ巻こ白に毛を入今これ迫を作く
作すへし又孔雀こおかてハ毎白十七文字の内こ孔
雀ハ一字も使ハ不申へ〻こと〻ぞ門人これくの
教聖る事ハ作るも知給ふ孔雀白ハ一物也
上こなりさものこなるゆ今使ひ〻ハ事て光を表ぜ
之一物の上こ成る白ハ

毛夜ハ清〻こてぬ〻鶴れ足　前

ひ白ハ絵こ一物の上こて作し〻りとも考こ使こ奥し
殺ひりる白とかん

いさ内〻ハ書見こ〻ハ少不申て　前

黄しる新かく雑子の粥瓜新　其角

常の内こくこ〻こ〻こ峰こ〻　伝教大師

〻〻ひすれ一〻こ毛を入こ〻り　利牛

光光れ白こ為時の足白毛毎と毛合を雑子の代ハ
新と合せ〻ると〻ひ人も殺ん又言見と常こ何を
あり世〻る〻いこんや又光師の毛合物こ乃代ふ
世物の内外を分けのたまふ〻〻　許云の〻ハ新の世物れ
内外の物を以くこ見しぐ毛合をものこ世物の外の物ハ
い〻ふと見こ〻り世物の内〻り毛合せる白と殺へし
又外もあるへし

去もやしけしきそのゝ月と梅　翁
ゆうんさまくら　初雪　ゆうて寺　文蓉
海ゝさや竹ゝ　雪をもり　藪ゆひ　素堂
俳や　嬉ひとりなく　月の友　翁
ちくれねを　又松風の　雪をもん　如花

芝芝は旨也論の内より合せる白し又
投網ゝ　袖ぬきて　すはるまて　正秀
二月や　大里柳も　梅ばかり　路水
卯のとれゝ　ゆうゝ毛の馬乃　庚申小　許六
馬乃耳　ちかめて　きし　梨子の花　文蓉

芝芝は旨也論の外より合せる白し　千川
芝芝は旨也論の内より合せる白し　發句を一物化
よりたるものゝ　ゆうゝ　旨也論の内ゝ　ちかめ
茅屋の論考てきゝる人ゝ

一　同来来白をするといひ来係のその八十方ゝ沈板ゝ芝芝は
いへは　蕉門ゝ来来の白をするの始ゝ　ゆうゝ
芝許六のいへるゝ　来来白を始ひ給ふ人ハ初心の
宜ゝなるゝし　今許六を挙て論するゝ不及却て
能ゝ　芝芝許六　俳諧を論する内来来の風
事を記きりぬるやあゝ　松も許六ゝ遠ゝ

仏法であるべきを行ぐていまぐ人の行ざる端を
論のくるれば是を一白くの新しうはじめに
たるべし一とせ

おろそひらあ乃山もろの花盛　去来

とつよるを作しうるは是師云今ハ丸人をあるべ
二三年もまうるくしとそこを拾芳地行脚のゆりて立ざ
行ひくり汝がたの山もろの花盛の白を吟行し
作りぬと注釈又須川の数白を拾ひ内て世に
いまぐ立情の白一白もろくこそ拾ふ人しとも行
未来の白を賞し給ハ自他の上ゝ行ゝ未来の

白を賞給ふ給ふ給ふ又未来の風を賞し給ふ
来ハ人とあらぬを叶ずまれるく差法て是を賞し
来ハ実てを風あ[illegible]ん[illegible]いろ是師今ち
此白必一変しく彩風流りせんと既ハ近化あるく
六年いまぐ彩風変し来る人なりたりく変する
似るものあるも近代のちん乃精神ひろ伊賀地
連て風は他なる白は風をむちゆうを安ろ[illegible]
是師の教るくし是師の白を他る安をくん
行ゝすこゝとも是師を世の内をは安伊陽を立
是師近化の年関東より乃尾陽を立来行ひ

以ての門人當門の風儀何ひそれて只子たのする者
一を学ぶ人しとのあひだ代と世えりり又涼りを出給ふ時
跡城ヒそれを世く来る春は巻旦ハいりそ志らんと
取事ヒ程今の風儀なる人しは又六年も絶ハ一変しく
除風稱かろく稽古と教給ふ世とちんさしで来年の
風を変して事ハ人ヒ世ハ絶る人しとや
作るの続ヒ世ヒ風ヒ

一同上ヒ流ヒ筋性ヒあり師ヒ世ヒ弟子ふヒ
流ヒ世ヒ流ふヒ流ふヒ年ヒ白数ヒ世ヒ
ヒ世ヒ作るの数ヒ使る人ヒて上ヒ世ヒ世ヒ

稽ヒ世ヒ師ヒ伝ヒ世ヒ流ヒ世ヒ弟子ヒ
ヒ分論ヒ世ヒ人ヒ師ヒ世ヒ流ヒ世ヒ
及ヒ世ヒ人ヒ師ヒ世ヒ流ヒ世ヒ弟子ヒ
ヒ風儀学ひ習ひ映年ヒ世ヒ一己の風ヒ上ヒ
一己の風ヒ建立する場ふ世ヒ
ヒ世ヒ儀押来る時ヒ師ヒ世ヒ計のごとく
弟子ハ年ヒ世ヒ計ヒ世ヒ
師ヒ世ヒ稽ヒ世ヒ貯要ヒ世ヒ師ヒ世ヒ
一口ヒ論ヒ世ヒ又ヒ世ヒ師ヒ世ヒ数ヒ世ヒ
傍ヒ世ヒ先ヒ世ヒ師ヒ世ヒ人ハ身ヒ絶ヒ世ヒ

きこえ〳〵ぶで〳〵許六のいへるごとの秘文伝とハ漏ス者云し
文作もおろ〳〵此事をわきまへしられ行りる
一向ニ是ハ文もなるゝん紅紫酔といふるゝ名も
なるゝ人〳〵といふへ文秘るゝんとそねるハ伝授なき業
あて法ものと論〳〵らしゝりにまた能せえ行るゝ
人の許六の許いう〳〵行るや
是此ものを邪道未なり之和方のもの業ゝて八上ゝ
級ひなくて下ゝそゝるものハなべぬらはゝ
ゝふ習ひゝとあるを秘も俳諧もあるゝ制法を
用ひ事〳〵ゝ秘ゝ秘ゝ羅なるゝ人〳〵されとも

なるゝんといへる云業ゝ上の法やゝて此の習ゝ人し
ひなるゝまゝ学ゝるやゝ行ゝとも秘ゝ業れ
事ハ云級〳〵秘伝ゝを考ゝを法〳〵行ゝん
一向俳諧ゝ不易流りとゝふるゝ行ゝ此二形のかハ別〳〵
近年不易流りゝ自伝ゝて吉の俳諧の筋をゝ考ゝ
或ハ不易ゝ流りゝゝれゝりとゝふ族もあれゝ者て
甲しなゝ血脈お伝ゝして生ゝれハ不易流りの形ハ
ゝ乃ゝ〳〵男ゝ女ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ出るゝひゝゝ
千里をゝるゝものゝあるゝ乃ゝ不易流りをゝしゝ
ものゝハあらゝとゝ此云いゝ

き蓋門の後不易流りをつたへるとの法をとれ申法を
去年代々を論するに代二つ聖人ふたり遊て拾ひ集てあ形ぐちの二十子を習ふ事を
いへ是今代集てあ形ぐちの二十子を習ふ事を
加ひらん又血脈お後して出生されで不易流りの
形ちをのいふ男と女とふ〻くにより男と子宝を
をぶをものりとへるハ論ふ〻しく切て論ちしと
いへんをとへは血脈ち師の教をお後するハ弟子れ
慢ひるこきよハ芸を習ひわく師と一拍子ふ〻ら
口伝開けで自ら変ふ到らんと芸をきしとすれかハ
ち血脈をお後せんとあれ芸を学むと又一旦芸を

学ひひるん人ひらん不易ハ不易ふれバ一度をわて
二度を改め学ふ不及流りハ流りまれで変ずる
場ふいふり芸を学ひさまだ師の流りをあらん
已り一代を建立しくふもも代写式ひらん芸又
名芸の人ちるへし只師の流りをおくれくふ
人ち絶ふ古代の名をふへし今詠ちの論をふれば
月をふて指を廃する例ふ芸ハ悟られとし
変ふ立ふくハ不易流りの二ッちと不既何をふらへて
きしとせんや佛を何祖を置も代得気返てふ
不易流りハ大事の物ふなりふ云ふ変ふあふ

教ゆるものこれなく手譜とする物もあらざる今日初めて
事ふれあるを以て巳正流と変風の名を紹太古人を
いふものなり先師初て二ツをなして永く絶了門人
ちらぼんバなるべきを不易流ならざれば先師の
俳諧の基ひをなすを流りを学ぶ人バ先師の
変風乃流りをおくば其角ハ蕉門のうるまし
不易流りの根究て学ひはんも彼一巳の
ぬむ所をそなまりなく先師の変風を注し却
門のへ言いやめ給ふ先師の変風を
使ひまゝバ角が後指秀才をおかて思らく角を

ちらぬる人おかんを惜むべし又紙ひろ八吟を
も拙し巳先師の変風一日もおこれんをを悔を
匠こゝとして志ひまるを以く今二之ま乃数ハ
並べたとへも流人のトを之ぞ先師ハ二ツを
少くこゝ事をこゝろ知こ浄く先師の流りこのこゝろと
いへも武ハ蕉深こゝ引き武ハ彩風を思ひあやまりて
流石の先者をまゝ誤ち紀ゝもあらずまゝく
象ぞ紀白を吐こゝ十が又ち猫義の風こゝ二ツ
こゝ乗拙ゝ今先師の彩風こゝ似るものゝ
ちて差出の流りを考とせんハ何をこゝろ

書屋をもうんやうに不易流行の二種しるしとなる
人を挙て論するに及りて察するに去年作られしと
文章の門正秀が拙句を書て送りいたく先師
敬ふなくなり給ひぬ伝の流り数年以来世
不易の句を楽んでとなる句拙句世に作られ
嘲嘆きしかるに文考作人より差出するやうなん
此拙句新なる人し正秀が云ハ先師敬ふ近代
給ひぬ色々彩用出て流りせんを流り数年
今日の風は永くとどまり兵不易の句成楽しと
いへるに用といふべし白とふるハ已に一色の白れ

上ヲかけていとを色をあてるに付ハ白れ上ヲ用ハ彩色より
色をかくるに付白用ハ白ハ三ツに詠ハ白ハ
あをを以て嘲嘆せるに西をもてに但和文中華歌を
用や俳諧の正秀が拙句ハ先師近代の風なる先師
情を又言て目出ふ彩用の出ざる事をなげきて
いとを御ふじむきしるし又云角一日待く云今
日門の徒先師の雲用を菓ふものを乃るに先師れ
拙句を乃りと日ハ出るを吟し給へバ故ハぶりと
きつとしいとを作の乃りとも誠の乃りとして一白の
色に門人のまりとまつとハきつとともものとせば

太夫ばかり一番子をもつて事なり一番子云程なの
いへるかハ先師の流りをあるものとあらば此所訳れ
一白とたづむるものと我及ざるといへども先師の流りと
一歩とおくれんすを忘る我ともに人我白とおかて
かくる云紫を用ひ我白ばかりまだ一白もなくば太用ば
をもたなく同じくハをあすんを詞と程只白とをむを
をりて流を学ぶものをとり是ばかりの人うたば我ともも
初学のものハ白を似を云紫によるもまよりは白に
あるりとかく懐るへきを云紫をうんあるうちをいた去
時ふへうんとうく此比さる人の詠より歌人とを無る

そを文と云太津の本芭乙孫等と系今一番流りを
委く習ひわく俳口を用きたり先師を角と云来
此二ツを諭ずるといふもを只流ばたりと師を角と云来
委く俳文しりといへるハいうれるすやをんハ
流りを一と俳文しりとするやそれハ俳文と及ば
詩と芭蕉少く俳と俳口を用るといへるを芭来分
不易流りをもとるを仏く俳と上通ず拙ならず
不易流りハ風をもの大根ことををてそと文
をんをんして上なを知る人一今許人の不易流行と
自称するといへるハ太のやくといへるを知るみう言角が

師匠なりしかども、法然の教をもひろめ、又我ものしたる
所をもあつめてこれを法然上人伝と号す。凡そ当流の人は
自宗をたてんとすれば、又意地をはるあまり、一家をたてんと
少々変化をはかるなり。
一、同道門の人々、法師の俗語のきらひ事なれ
ども、俗を執りて道理をあらはすべし。
一、同道門の人々、法師を俗語のきらひ事なれ
ども、俗を捨て、道理をあらはすべしや
一、機は只和人の場をはなれて、法師と
もなむ人さまざまなれども、強ひて我も
用事正直なるをもひは、俗語を捨て、法師のもの

方へ又俗語の名人なるを、法師をもひろめ、法師
云々、俗語の名人なるをもひろめ、法師
一、同法師をもむ、俗語伝、我不審、道門の人は
撰集をもとめ、自ら下文を書、或は芭蕉庵と
号、集、庵とかく書、雅号の猿蓑、なを世とも
法師をもふるおろそかなるべしいかがなるや
をもむ、世俗をもせ俗と号、いかなるや
庵と号するは、法師の教なれども、又
御私なれば、昔を角、初て号、私とも
師の名なるべき事、法師の人師を

さて翁といふこと[illegible]
称すまして季吟を師とし
志ゝを紙だ門人の悔ゆ[illegible]
翁と申さんといふる事をてゝ[illegible]
今俳諧の集をおかて翁と申せんと天下代人芭蕉翁
世ゝ事を紙ゝ称ゝ紙を初て門の元のなと
なすへしといふ此あて芸角ゝ集を初てゝ紙書
又芭蕉と改る事ハ猿蓑集撰する時自の下て
翁と申之作云此門下の集をゝゝ多くハ紙。
翁と申せり也悔ゆ人し事云作の徳遥ゝおかてハ

志ゝ紙とも事子ゝ敬ゝ紙ゝハ翁と書せん事
若しかゝゝ之作云門人なゝ自分の家ゝ収んゝ
発を角ゝ方へ世ゝ廣め人ゝ此法をんゝ[illegible]
涉月ゝ人九赤人の事此重と[illegible]
集ゝ[illegible]
下知ゝ法ゝ之ゝ伝ゝ猿蓑集ゝ改てゝ紙と申し
作ゝ別ゝ師を[illegible]

條評

一或人問芭蕉門の所白ゝ十七所の教ゝとて一ゝ[illegible]

路通は浦々の人にて俳諧を定て出家を
なす行脚
三十七年とやらん四年ばかりの
間ふるさとの人を伴ひ給へ
之年師の之師と語て云近来大津の連衆
名古屋に来て蕉門十七年の俳句不審侍
はるよし故中名古屋の連衆皆々伝聞
事を作るやと師云先俳諧十方句紀事なり
之比加賀の門人伺菓がもとより来て
新々教ふるけぶ新々句の新事記し

永し作るべし故に句をむ先がために俳句の大数
事出し作るとも必ず記すべ俳句を定てありて
初心の迷ひ之へしと思ひ給ふ事書紙をとどむ
定て反古の端を拾ひ人々先をいふなる事と
大笑ひし給へ四五年以前大津其の事と
路通久しくかりて作る事ばかりを不知
限り意識の人に伴ふるなる人に俳句は子変
若化ありて数をものてしるものはあらじ

芭蕉翁門人拙六感之日

花やこの為拙事其角より及ぶ

名月や畳のうへも三十松の影

かくれ家や拙が嵐雪より及ぶ

梅一輪一輪ほどの暖かさ

かくれけりかくれて尤奇よかりけり

埋こゝ拙無涼しさや鐘の松

閑の紅葉丈艸よりおよそ
懸を出くて傷る物を反射
かゝる事鄙城にはよそ
長松の親の名を集る古歌
實なる事去来よりも及ぶ
遠くと山〳〵と和くや雪の門
さ花也此實を以て瓊浦の人
とゝのゝかを其一脚と以る歟

かゝを再校せるも又松の花
實なる事を感じて雪中庵蓼太
跋

雲中菴俳書目録

芭蕉翁句解　蓼太述　曉花遺稿　吏流
白滝百韻　機石集　前編花之解　如雷夜光
髭帋帯　宗祇廿五禁　蓼太解　續其代　古風雷文集　蓼太撰
俳諧唐詩三物　雲門社中　幸嵩之吟　柳波　湖源
蜀川夜話　古人句拾　葛才撰　名乃宿　蓼太　眠江
墨絵合　教仙　如雷赤羽左蒙　南望牛水教光　傳都回答　風利述
魚と水　古今狂女　女野菊撰　鄭蜀行脚　山奴集

江戸日本橋通二丁目
戸倉屋喜兵衛板

龍門新　宣和二年仙并芸尺紙　都雁撰
水乃音　拙雲撰
東坐生移
菩薩新七部撰　蓼太撰
玄乘湖東問答　桃鏡
百羅　筑陽　馬老撰
月下録　京三房梅塵子生二図会　後花色房選
俳諧無門關　蓼太選
蓼川集　新古三句乃月句
桃鏡撰
百五十番句合　蓼太　吐月
蓼太　正花論　白牛撰
五器一具　因竹撰
梅の渡　筑陽　左更撰
附合百番句合　蓼太評　社中
後遍花三斛　如口色選